

日出前日没後ニ拘帶
ヲス搜索スルヲ得
行モテテ即時バノ
覺知サトリ
シル

在營ニアル軍人屬
武官又ハ附屬ノ所屬
文官ヲ云フ
長官シハ行軍訓練
演習等ニテ隊ヲシ
ミテ行クヲ云フ
引致スルヲ能ハザル

巡査ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令
狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第三百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルヲ能ハ
サル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ搜
査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キ事ヲ請求スルヲ得

第三百三十六條 陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ合狀ヲ發シタル
時ハ所屬長官ニ合狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムヲ得サル
差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ合狀ニ應セシム可シ
其行軍ノ際亦同シ

第三百三十七條 勾留狀又ハ収監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其
合狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スル

時疾病ニ罹リ又ハ日
時塲處ノ都合等
ナ最近イチバン
リヤカキ
テ渡ス可シ
令狀執行
ニ
ス渡

執行スル能ハザル時
被告人逃亡潜匿シ若
クハ疾病其他正當ナ
ル事故ニ因リ執行ス
ル能ハザル時

一能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルヲ得
何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ合狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取
リ其證書ヲ渡ス可シ

第三百三十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ之ヲ執行シ
タルヲ又執行スルヲ能ハサル時ハ其事由ヲ合狀ノ正本ニ記
載ス可シ

巡査ハ合狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受
取證書ヲ渡ス可シ

第三百三十九條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケ可キ被告人既ニ監倉
若シハ獄舎ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正
本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

第四百十條 密室監禁ノ場合ヲ除ク外被告人ハ監獄則ニ從ヒ
官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルヲ得

接見
デア
フ

書翰シヨ書籍ホ
授受ウケトリ
ワタシ

貸與カシア
ダヘル

第二節 事實發見ノ爲
人ト交接ヲ禁
ムルナリ
ヨ職權
シ

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレ
ハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サス但豫審判事ハ其
書類ヲ留置シコトヲ得

第四百一十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ
者ニ非スト恩料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收
監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見
ヲ聽ク可シ

第四百一十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ
從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第二節 密室監禁
第四百一十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト
思料シタル時ハ檢事ヲ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若
クハ收監狀ニ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲

スコトヲ得

第四百一十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ
之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接
見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルコトヲ許サズ
食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特
ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第四百一十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ
其言渡ヲ更改スルコトヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ
豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規
則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節 證據

第四百一十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ摸樣ニ因リテ有罪ナ

允許ニル別室ベツ
ヤウ

飲料ノモ藥餌ノス

指名タレトナザ

超過スモ更改タム

事件カト

推測 オシハ
カハル

證據 犯罪ヲ証明スル
ニ付キ其効力ノ
確實ナル者ヲイフ例
ハハ内亂ノ豫備陰謀
ヲ爲スニ付テ懲懲之
ノ血判書ノ類
證據ニ比スルニ其効
力ノ薄弱ナル者ヲ云
フ例ハハ盜犯
ノ足跡ノ類
急遽 イソガ
シキ

ルノ推測ヲ定ムルコトナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證 調書證據物件證人ノ陳述鑑定
人ノ申立其他諸般ノ懲懲ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ
因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據懲
憑ヲ集取スル可シ

第四百十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證
人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作
リ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサル時ハ
立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ
其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ
前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ

署名 シブシテ捺印
ナシカキ捺印
ギヤウ對質ヒキアハ
サオス對質セテトリ
ス

恐嚇 オド 詐言 イツ
ス 詐言 ハリ
陳述 マチシ 錄取 カキ
タテ

履行 ノミテ
コナフ

立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナシテ爲シタル處分ハ其効ナカル可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ
爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付急遽ヲ要スル時ハ此限在ラス

第四百五十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲
メ恐嚇又ハ詐言ヲ用ニヘカラス

第四百五十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀
聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印
セシム可シ若署名捺印スルコト能サルハ其旨ヲ附記ス可シ
書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルコトヲ記載シ豫審判事ト共ニ署
名捺印ス可シ

變更ルハ増減ヲスハ

第五百五十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キヲ立申
タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述
ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第五百五十三條 被告人ハ陳述書ノ原本ヲ求ムルヲ得

第五百五十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナル人違ナキ其
他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトス
ル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシム
ルヲ得

共犯刑法第一
編第八節

發見見出

第五百五十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一
切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關ル部分ヲ讀聞ス可シ

第五百五十六條 被告人又ハ對質人疊ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ

第五百五十一條 第五百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適
用ス

通事 記号手様等ヲ用
ヒ意ヲ通スル所

ノ通 國語ニ通セザル時地
ノ方言ヲ解スルノミ
ニシテ普通ノ國語ヲ
解セザル如キ 正實
コソナリ

ト通譯 通事 宣誓 榮譽
ト通譯 翻譯 宣誓 ト本

必ニ誓ヒ以テ其陳述
ノ正實ニシテ誣罔ニ

出テザルヲ保 犯所
スルコトナリ

ニ臨ミ檢證ヲ爲ス 其
所ノ景狀ヲ檢視シ其

罪ヲ犯スノ方法ハ如
何ナリシヤ犯人ハ如

何ナリシヤ犯人ハ如
何ナリシヤ犯人ハ如

治罪法

啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ疊者啞者文字ヲ知ラザ
ル時ハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セザル時亦同シ

第五百五十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ
書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第五百九十二條 第五百九十三條 第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之
ヲ適用ス

第五節 檢證及ヒ物件差押

第五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ
重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第五百五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告
人ノ人違ナキヲ證明ス可キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

何シ逃亡セシヤチ一々取調ヘ其証據ヲ取集ムル

物件シテ臨檢至リテトリスラベ
チナスコト 監護リマモ遞送チシリ擔任キ
ケ周圍マハ閉鎖トナ
看守者ニバン

藏匿カ
ス

又被告人ノ利益ト爲ル可キ摸樣ヲモ記載ス可シ
第百六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其
出所及ヒ摸樣ニ因リ被告人ノ人違ナキコト又ハ犯罪ノ摸樣ヲ
知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印テ爲シ
目録ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ
擔任ス可シ

第百六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日
ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置
クコトヲ得

第百六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可
キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルコトヲ得
被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ
親屬若シ其在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代
人ヲシテ立會ハシムルコトヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フコトヲ得ス但豫審
判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載タル處分ニ立會フコトヲ得
但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遅延ス可カラス

第百六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第百六十條
ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目録ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ
第百六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒ
ルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲シム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

遅延ニ
ン

辨解
イヒ
マテ

各別ベツ

允許シユル

逐斥オヒ

時宜ノツガフ囑託ノ

官署シヨ事由ガコト諸

會社ノ海陸運漕開披封

ヒヲ

第百六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クニ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヲ禁スルヲ得若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヲ得

第百六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得

第百六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル

不用ニ屬シタル時豫
終結ニ至ル時又ハ
公判落着アリタル時
ノ如キコ
レナリ

夥多
タシ
サン

各五名
原告被
告各

書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節 證人訊問

第百七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各々五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スヲ得

第百七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但

裁判所々在ノ地ニ住
セサル時ハ自己ノ管
轄内ニア
ルトキト
雖トモ

勾引ヒキタ
テ

其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ
若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記
ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第七十二條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セザル時
ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ
治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ
其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス
可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セザル時ハ罰金ヲ言渡シ且
勾引スルコアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ廿四時ノ猶豫アル可シ

第七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因呼出ニ應ス
ル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ
訊問ス可シ

第七十五條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル
時ハ其所屬長官ヲ經由シ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出
廷セシム可クヲ認可シ又ハ職務上己ムコトヲ得サル差文アル
時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除
クノ外證人呼出ニ應セザル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上
十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控
訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ノ共ニ再度ノ呼出狀

經由手ヲ
ハル
認可キハト
ノケル
事由コトノ延期ニ
ン

費用 イリ
擔當 ヒキ

二倍ノ罰金 例ヘハ前
罰金ナレハ今度ハ十
圓ニスルカ如シ

豫知 マヘカド
シルハニ

遺失 ナシ
ス

ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルヲ得但其費用ハ證人
チシテ之ヲ擔當セサシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且
勾引狀ヲ發スルヲアル可シ

第百七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケ

ザルコト其呼出狀第百七十三條ノ規則ニ背キタルコト又ハ豫知
シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシコトヲ證明シタ
ル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第百七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ
書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキコトヲ
證明ス可シ

第百七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其
氏名年齒職業住所及ヒ第百八十一條ニ記載シタル者ナリヤ

否ヲ問フ可シ

第百八十條 豫審判事ハ證人チシテ愛憎畏懼ノ心ナシ正實ニ
陳述ヲ爲ス可キコトヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印ス可シ若
シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
宣誓書ハ訴訟書類ニ添置シ可シ

第百八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但
事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クコトヲ得

- 一 民事原告人
- 二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬
- 三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受
ルル者
- 四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十一條 列記セ
ル四項
ハミナ愛憎畏懼ノ念
アル恐アリ故ニ証人
トナルコトヲ
許サス

愛憎 己レニヨキ者ノ
爲ニハ罪トナル
ベキコトヲカルコト
ヒ己レニアシキ者ノ
爲ニハカルキ罪畏懼
ヲモオモコイフ
己レノ目上ノ人タル
ヲ恐レテ罪ヲカシス
正實 ホシ
トウ

知覺モノオホ精神
ヒサトリ精神マ
シ刺奪一生活トリ
停止
一時
ハメル

現ニ陳述ヲ爲ス可キ
事件ニ付キ曾テ訴テ
受ル 其犯罪ノ場所
日時機機罪名
刑名被害者等ノ異ナ
ラザル事件ヲサス

第百八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一十六歳未満ノ幼者

二知覺精神ノ不充分ナル者

三瀆辱者

四公權ノ刺奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五重罪事件ニ付シ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁

錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付公判ニ付セラレタル者

六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴テ受ケ其證憑充

分ナラサルニ因リ免許ノ言渡ヲ受ケタル者

第百八十三條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサ

ル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十二條ニ從ヒ

罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代理人辯護人代書人公證人若シハ神官僧

秘密 ナイ委託 タノ

確實 カシ同行 イツシ

フシ

倍其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者

ハ前項ノ例ニ在ラス

第百八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問

ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證

人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得

第百八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ

必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行

スルコトヲ得

若シ證人同行スルヲ肯セザル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從

ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條 第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ就

テモ亦之ヲ適用ス

第百八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記

ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ
第百八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作可シ
其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルコト又ハ爲ササルノ事由ヲ記
載ス可シ

第百八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヤヲ
知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聽カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更増減セシムコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請
求アリタルコト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事
及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルコト能
ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第百九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルコ
トヲ得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高
ヲ得

即時其供述ヲ終リニ
退廷スルノトキ
ナ

鑑定 見定メルコトニ

テダトヘバ人ヲ

殺セシニ藥ヲ以テセ

シト思料スレバ醫師

之ヲ鑑定シ又ハ土藏

ヲ壞リテ入りシニ刃

物ヲ以テセシカ又ハ

鉄槌ヲ以テセシカト

思料スレハ職人之ヲ

鑑定スルノ類ナリ

結果ナリ

タチ

勾引狀ヲ發スルヲ得
鑑定人ハ証人ノ如
ク必ラス其人ニ限
ルニ非ス其事柄ニ適
當ナル職能アル者ナ

ニ等シキ 價金ヲ要ムルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑑定

第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナ
ラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニヨリ鑑
定スルコトヲ得可キ者一名又ハ數名ヲ鑑定ヲ爲サシム可シ

第百九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス
可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルコト及ヒ呼出
ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キコトヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應ゼザル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分
ス可シ但勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

レバ固ヨリ其何人タルヲ問ハザルカ爲ナリ
紙尾 カミノ背セヌシ
ウチ
セズ

急速 イツガ

成ル可シ云々豫審判
ノ豫審處分ヲ行フニ
因リ差支アル外ハ成
ル立會ス 増加ス
ルヲ要ス 増加ス
結果 鑑定ノ上得タル
發見物ヲ云ナリ

其宣誓ハ第八十條ノ式ニ從フ
書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ
之ニ宣誓書ヲ添置シ可シ

第九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓ノ鑑定ヲ肯セサ
ル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ
罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第九十五條 第八十一條第八十二條ニ記載シタル者ニ
ハ鑑定ヲ命スルヲ得ス但急速ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可
キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヲ得

第九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以
テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヲ得

第九十八條 鑑定人ノ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ

ニシタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意
見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及
ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記
ト共ニ捺印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置シ可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル
通事ノ作りタル譯本ヲ添置シ可シ

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ放費給料其他相當ノ費用ヲ給
與ス可シ

即チ毒殺事件ニ付テ
ハ胃腸中ニ毒物ノ正
跡ヲ含有スルヤ否
傷事件ニ付テハ其傷
果シテ致命ノ起因結
果ルヤ否等是ナリ
果チ得サル時 死体腐
其毒殺ナルヤ否ヤ知
ル能ハサルノ類ナリ
契印 ツハキメニ推測
印ヲオス
各自ノ檢印
命令書 申付タル
譯本

第八節 現行犯又ハ準現行ノ罪犯ノ場合豫審ヲナス手續ヲ示ス

第二百一十一條 現行ノ犯ハ至急ヲ要スル時アルヲ以テ茲ニ本條アル所以ナリ

檢證調書 證據トナル可キ事ヲ取調ヘテ書付ル書

終結ノ時

但罰金ノ言渡云々罰金ノ言渡及ヒ宣誓ヲナサシムルノ權ヲ第四條ノ明文アレバナリ

宣誓ヲ用フルコトノ事實參考ノ爲ニ其陳述ヲ聞クノミ

請求書 豫審ノ請求ナリ

第八節 現行犯ノ豫審

第二百一十一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル場合ニ於テ其事件急遽ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第二百一十二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百一十三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ズ

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルコトナク之ヲ聽ク可シ

第二百一十四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百一十五條 第二百一十三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但令狀ヲ發スルコトヲ得ズ

司法警察官ハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第二百一十六條 檢事被告人ヲ受取ル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ逮捕ヲ爲ス可キ者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ釋放ス可シ

第二百七條 検審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得

第二百八條 検審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ス可シ

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ラス被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及スト思料シタル時ハ直ニ輕罪裁判所ニ呼出スヲ得

第九節 保釋
第二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ収監狀ヲ受ケタル

保釋 被告人ノ請求ニ因リ保證金ヲ求メテ之ヲ勾留收監ヲ釋シコトナリ

出廷 サイパンシヨニイヅル

被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出シニ應ジ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヲ得
被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ルヲ得

第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ
保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ時金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額

報知 セシマ

時金 タシハハ

充分 ヤイシ

資力 アルモノ

全部又ハ幾分ヲ没入
 ス可シ 事由ヲ擧
 トリア 民事ノ規則事
 ニ付テノ訴訟 徴収ト
 手續ナリ 徴収ト
 タテ

ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヲ得
 第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ
 出廷セザル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可シ
 第二百十五條 保證金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審
 判事其言渡ヲ爲ス可シ
 若他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徴収ス可シ
 第二百十六條 豫審判事保證金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡
 ヲ取消ス可シ
 又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スニ必要ナリトスル時ハ檢事
 ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ
 第二百十七條 豫審判事保證金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違
 罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕
 罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前

還付スル

貴付 被告人ヲ其親屬
 又ハ故舊ニ交付
 シ監督ノ責ニ任
 セシムルナリ
 第十節 豫審判事ノ取
 場合ヲ
 示ス
 管轄ニ非ス 犯罪ノ性
 告人ノ身分ニ關
 スルモノナイン
 終結 取調ノスミ

ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ
 第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言
 渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ
 爲シ若シハ保釋ノ言渡ヲ取消タル時ハ保證金ヲ還付ス可シ
 第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トチ問ハス檢
 事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヲ得
 第十節 豫審終結
 第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他
 ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ
 付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ
 檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ
 第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其
 條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヲ得若シ豫審判事其請求

ヲ肯ゼサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後

ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヲ認

メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スル時ト認メタ

ル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件

ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲

シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

一 犯罪ノ証憑充分ナラサル時

二 被告事件罪ト爲ラサル時

三 公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

第二百二十二條 本條

如ク定ムルモノハ檢

事ハ第二百四十六條

ニ定ムル如ク豫審終

結ニ對シテハ故障ヲ

ナスヲ得サル

一 裁判所ニ於テ推測

ヲ以テ罰スルコトヲ

得ザレハ

二 親屬相盜ノ如

キコトナリ

三 第十一條ニ定メタ

ルニ因リ公訴既ニ期

滿免除トナリタル場

合

六 刑法第一編第四章

第七十五條乃至第

八十條第三百十四條

及ヒ第三百十五條ノ

場合ヲ謂フ要償ノ訴

モノナリ

ナ爲スコトヲ得ス 刑事

所ノ關係離レタルヲ

以テ附帶ス可ザレバ

ナ 釋放放免ト異ナリ

リ 釋放放免ハ全ク公

訴ヲ免シテ被告人ノ

自由ヲ復スルヲ云ヒ

釋放ハ罪ノ問フ可キ

アルモ其輕且微ナル

ノ故ヲ以テ法律上其

自由ヲ停止スルコトヲ

四 確定裁判ヲ經タル時

五大救アリタル時

六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴

ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警

罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ

釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁

判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト

思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責

許すルニ因リ其
勾留ヲ解クチイフ

其言渡ハ保釋ヲ許シ又
ハ責付ノ言渡

指揮
ツ

事實
ガヲ理由
道理解又
ハヨリ

原由
ヨリト明示
アキ
ヲカ
メス

ロ
ド
コ

付テ爲ス可シ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルヲ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁

判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲

シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮ア

ルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キ

ヲ記載ス可シ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニテ事實及ヒ法律ニ依リ其

理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示シ若シ被告人

ヲ勾留ス可キ時ハ其原由ヲ明示ス可シ

冤訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト公訴受理ス

正條
第何條ニ當
ルト云フ

謄本
ツツ

被告人ヲ逮捕スル能
ハザル場合勾留狀ヲ
發スルモ
之ヲ逮捕スルヲ能ハ
ス若シハ一旦逮捕ニ

可カラサルコト及其原由又犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ其

言ヲ明示ス可シ

違輕罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲

スニハ犯罪ノ性質模樣證據ノ充分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス

可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ

被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事長

事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十

六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルヲ能ハサル場合ニ於テ重

罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ

移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被

就キタル後逃亡シテ
其所在ヲ知ラサル場
合ナリ上訴 故障
ヲナリ

財産家財簡略ヲガ
資産簡略ルキ

故障 豫審處分ハ公然
被告人檢察官互

ニ辨論シタルモノニ
アラザレハ豫審判事

ノ處分不當ナキヲ保
シ難シ故ニ之ヲ改正

スルノ申立ヲナスヲ
云フ然レハ四個ノ原

因ナケレ
ハ能ハス

一 豫審判事ノ管轄コ
ノ非サルノ申立ヲナ

スモ判事之レヲ棄却
シテ豫審ヲ繼續スル

被告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲
スコト得ス

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假
ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可ク民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨ
リ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡略ナル報告書ヲ差出
ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審
終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコト得

一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二 法律ニ背キ合狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

場ニ被告事件禁錮以
合上ノ刑ニ該ル可

キ時ニ非スシテ勾留
狀ヲ發シ若シハ此令

狀ヲ發シタルヨリ十
日ヲ過シルモ被告人

ヲ責付スルヲナシシ
テ収監狀等ヲ發セザ

ル時等ニ 三 被告人ノ
レナリ 請求ヲ待

タスシテ保釋ヲナシ
檢事ノ意見ヲ聽カズ

シテ責付ヲナシ若シ
ハ保釋責付ヲ爲ス可

キ時之ヲ爲 四 豫審判
事ハ其權

限ヲ超越シテ專横ノ
處分ヲ爲シタル場合

對手人
テ

三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サル時

四 越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲コト得

第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局
ニ趣意書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ原本ヲ對手人ニ送達シ對
手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコト得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シ
タルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以
上ニテ趣意書答辨書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ

之ヲ判決ス可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シハ豫審終結

ヲ以テス

之ヲ判決ス可シ

忌避 此者ハ此豫審判
 事ノ親屬ナル故
 我ニ利ナシ必ス幾分
 ガ一方ノ利ヲ計ルト
 思フハ之ヲサケテ
 外ノ判事ヲ掛リニ願
 フ配偶者アレ親屬律
 上親屬ト稱スルモノ
 ハ刑法ニ詳ナリ
 賄賂 ナヒ贈物ツ
 收受トル賜許贈物ヲ
 手コ入レザルモツケ
 トルヲ承知スル
 認可スル棄却採用セ

ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スヲ得
 第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告
 人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルヲ得
 一豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配
 偶者ト親屬ナル時
 二豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時
 三豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等
 ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽
 許シタル時
 第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其
 申立ヲ爲スニハ趣意書ニ通テ書記局ニ差出ス可シ
 書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケ
 タルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルヲ得趣

藏置 オサメ
 オキ

意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送
 達ス可シ

辨明書 イヒリ
 ケガキ

第二百二十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申
 立人ヨリ故障ヲ爲スヲ得
 會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ
 判決ヲ爲ス可シ

繼續引ッ
 シ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立
 ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼
 續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スヲ得ス
 又急速ヲ要セザル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルヲ得
 第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタ
 ル時ハ上告ヲ爲スヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非
 サレハ之ヲ爲スヲ得ス

回避豫審判事自ラ其掛リテ遠慮スル

トコ

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原

由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局

ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シ

タル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ

其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ

前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲ス可シ得

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人

ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルコトヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌

避スルコトヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其

旨ヲ會議局ニ申立ツルコトヲ得

許否 ヌルスカユルサ

ハンケ 豫審終結ノ言

渡 第一管轄違ノ言渡

三 重罪裁判所ニ移ス

ノ言渡 第四輕罪裁判

所ニ移スノ言渡 第五

違警罪裁判所ニ移ス

ノ言渡

第二百四十六條 三項

被告人ハ自己ノ利害

ニ關スルノ外ハ故障

ヲナスヲ許サ

ルナリ

起算 カブヒハ

シムル

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申

立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲

スコトヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ

言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得

輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審

判事ノ管轄 違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違

ニ非サレハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達

アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ

通知
セル

附帶ノ故障他ノ一方
ノ言渡ニ服セズシテ
故障ヲ爲シタルニ因
リ已モ亦之ニ附帶シ
テ不服ノ條件ヲ申立
ルチイフ是レ原故障
即チ主タル故障ニ對
スルノ
義ナリ

申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通
知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答
辨書ヲ差出ス可シ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマ
テ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲ス可シ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達
ス可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出ス可シ得

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタ
ル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告入チ勾留シ又ハ
保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辨書其他訴訟書類ヲ會

議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從
ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部
又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ
又被告入チ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲ス可シ得

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名
ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ
取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違 越權
又ハ公訴受理不可ガラサルコトヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ
豫審判事ノ言渡ヲ取消ス可シ得

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ趣意ヲ受

指示 缺ケタル條件ヲ
指示スルナリ

發見
ス

共犯 二人以上共ニ罪
ヲ犯シタルトシ

附帶ノ犯罪 第三十八條ニ詳ナリ

發見見出

ケサル者アル一附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受サル者アル一ハ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ
檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ
會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

上告 四百十條以下ニ詳ナリ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ原本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ
第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可シ得

第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キ一及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フコトナカル可シ

第二百五十九條 第三百一十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ
檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ
重罪裁判所外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受ルコトナカル可シ但新ナル證據アル時ハ此限ニ在ス

確定 各種ノ言渡ノ上訴アラサルニ因リ又ハ上訴ヲ受ケタル大審院又ハ輕罪裁判所會議局ニ於テ其言渡ヲ認可シタルニ因リ確定 控訴裁判所 檢事長 重罪裁判所 檢事官ノ職務ヲ行フモ 以外 輕罪裁判所ナリ 所又ハ違 警罪裁 罪名ノ變更 謀殺 詐欺取財ト爲シ盜罪ヲ

リシナ

新ナル證憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

第四編 重罪輕罪違警罪裁判所ニ於テ豫審終結ノ言渡ニ因リ或ハ豫審ナクシテ直チニ起訴アリタルニ因リ又ハ上等ナル裁判所ノ判決ニ依リ之ヲ移サレタルニ因リ之ヲ管掌通則重罪輕罪違警罪區別ナク且大審院ノ訴訟手續ニ係ルモノト雖モ總テ通用スベキ規則ナ簿冊メン登記ノセ

第四編 公判

第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルヲ得

第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡之ヲ公行ス否ヲサル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

順序シテ公判裁判

テ衆人ノ傍聽ヲ許シ公ケニ判決スルヲテ減縮ツメ重要ナル事由

訴認關係人ノ不在若シハ疾病ニ因リ出廷シ難キ事由ノ證明アルハ或ハ

犯罪ノ證據充分ナラザル爲メ公判ノ期日ヲ延引スル訊問等是ナリ

辯論マナシ公行ノ傍聽ヲ許シテ公安ヲ害公ケニスル

國事犯ノ如猥褻ニシキ是ナリ

涉リ風俗ヲ害スル

第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セザル時ハ之ヲ引致スルヲ得若シ出廷シテ辯論スルコトヲ肯セザル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルヲ得

辯護人ハ裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代官人ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲

スヲ得

ノ恐アル時 強姦有
如キコ拘束 繩鎖等ノ
レナリ 拘束 拘束ナリ
守卒 バン人也 逃亡若
スル 禁錮以上 禁錮以
ナリ 禁錮以上 下ハ固
ヨリ本人ノ出廷 引致
ヲ必要トセス 引致
巡査ヲシテヒ 對審ト
キタテシム 對審ト
シテ 雙方辨論ヲ盡シ
スナ 辨論人ノ申立
ル爲メ或ハ充分ニ我
見込ヲ言フノ出來
又時ニ問ヒ合ハセ又
ハ代テ言シムルモノ
暴行レバ 喧嘩 ヤカマ
シクス

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧嘩ヲ爲シ辨論
ヲ妨礙スル時ハ 裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハザ
ル時ハ 檢察官ノ請求ニ因リ又職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシ
メ若クハ勾留スルヲ得
前項ノ場合ニ於テハ 對審トシテ引續キ辨論及ヒ裁判言渡ヲ
爲スヲ得
若シ辨論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ
第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルコ
能ハサル時ハ 痊癒ニ至ルマテ辨論ヲ停止ス
辨論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後
新ニ辨論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止
シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辨論ヲ停止シ又
ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辨論ヲ

ル 妨礙シヤ 裁判長 席上
裁判官 告戒シツカニ
ナリ 告戒セヨトキ
ナツ 退廷 禁錮 勾留 禁
ケル 以下 禁錮
以 精神 錯亂 ガヒ 痊癒
ナホ 停止 ヒカ
ル 停止 ヘル
告知書 シラセ
告知書 ガキ

爲ス可シ
若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辨論ヲ終リタル時
ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナシ裁判言渡ヲ爲ス可シ
第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時
ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送
達シタルノ際アルニ非サレハ 闕席裁判ヲ爲ス可カラス
豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル
場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告
人出廷セサル時ハ 闕席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若ク
ハ戸長ニ送達ス可シ
第二百七十條 闕席シタル被告人ニ付テハ 辯護人ヲ用フルコ
トヲ許サス但其親屬故舊ハ被告ノ出廷スルコト能ハサルノ事由
ヲ證明スルコトヲ得

裁判所ニ於テ其事由テ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルコトヲ得

第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ

稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルコトヲ得

第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラヌ裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ

檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作

稱讚誹謗ノ制
止セシムル
其身分ノ如何ニ拘ハラヌ
高等法院又ハ軍
事裁判所ニ屬ス
ルモノ
ト雖モ

ル可シ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲シ輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラス但辯論ニヨリ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審判事必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判

送附
オシリ
ツケル

附帶ノ事件
ツキソツ
タルコト

ガ豫審判事取調ベ
タル口供ニ因リテ公
判ニ取掛リタルニ辨
論中以外ノ罪犯ヲ發
見スルヲ
云フ

本案 其事件ト云フ

判ヲ停止スルヲ得
第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマデ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スヲ得
裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理スヘカラサルノ言渡ヲ爲スヲ得

控訴 第三百三十八條
第三百六十五條
上告 第四百四十條

違警罪裁判所云々大
院ノ裁判官ハ之ヲ
忌避スルヲ得ス
干預
イル

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス
第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヲ得豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シ

變災厄難ノ爲メ 裁判官被
告人又ハ其辯護人變
災厄難ニ罹ルナリ

タル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ
第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマデ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得
忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス
第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百卅八條ヨリ第二百四十五條迄ニ定メタル規則ニ從フ
第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ
變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ
第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ
第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因

朗讀
コハダカ
ニ目ム

リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作りタル調書及ヒ檢證
書類ヲ朗讀セシムルヲ得
是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ効チ有ス

第二百八十五條 調書ヲ作りタル司法警察官ハ檢察官其他訴
訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ

以テ之ヲ呼出スヲ得
豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人

ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書説明ノ爲之ヲ呼出スヲ得
第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出

允許
シユル
説明
トキキ
カシ
録取
トル
比較
ス可キ時
呼ヒ出
スト雖モ豫審及ヒ公
判ニ於テノ陳述齟齬

スヲ得
豫審ニ於テ録取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サ
ル時證人呼出テ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於
テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ

スルヲ以テ之ヲ
比較スルナリ

因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヲ得

第二百八十七條 第二百七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニ

モ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又陳述前辯

論ニ立會ヲ可カラス

第二百八十九條 證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條 證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ

訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其

順序ヲ變更スルヲ得
第二百九十一條 證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊

分明 ヨクワ
カル

證人ノ陳述不實云々
該ル可キ者 刑法第二
百八十條ニ定メ
タル罪ヲ犯シタルモ
ノナ
リ
故意 或ハ罪ヲ輕クセ
ントシ或ハ罪ヲ
重クセントコトサテ
ニモシロムコトナリ

問スルコトヲ得ス
陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問
スルコトヲ得
訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル
爲メ證人ヲ訊問ス可キコトヲ裁判長ニ求ムルヲ得
第二百九十二條 證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上
ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其
他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀
ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ
其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ
本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請
求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言
渡スコトヲ得

即時 スグ
サマ

關席 裁判所へ出
テヌ
出廷 裁判所へ
出ル

閉應 役所ヲ開應 役所
シマフ 開應 役所
ヲヒ
シラ

治罪法

第二百九十三條 證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時
ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡
ニ對シテハ故意及ヒ控訴ヲ許サス
一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料
二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金
被告人關席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科
料罰金ヲ言渡ス可カラス
第二百九十四條 本條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達
ス可シ
其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルコト能ハカリシ正當ノ
事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科
料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ
但重罪裁判所閉應ノ後ハ其開應シタル裁判所ニ其申立ヲ爲

ス可シ

意見

陳述

再度

勾引狀ヲ發ス可シ
公判ニ延期シタル再
度ノ期日ハ之ヲ勾引
シテ必ス出廷セ
シムルナリ
適用
モテ
アル

第二百九十五條 證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スヲ得
檢察官自ラ其請求ヲ爲サ、ル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條 證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル料料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第

二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條 被告人暨者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第二百五十六條第二百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ

裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得

第三百條 證據調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヲ得ス
檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スヲ得但辯論ノ

重者ツン啞者オ國語
ニ通セサル者日本ノ
シラザルモノ
其順序ヲ變更スルヲ
得一旦順序ヲ定ム
發言イヒ檢察官法律
ノ爲メ民事原告人陪
審官ノ爲メ民事原告人
要求ノ爲メ被告人辯護
人自ラ辯護ノ民事擔
當人ノ發言ス

當人 其負擔スル所ノ
義務ヲ免カレン
トスル爲 妨礙シヤ
メ發言ス 妨礙マ
終 イチバン 拋棄ス
シマヒ 拋棄ス
相當ノ 裁判ヲ爲ス可
シ
コソ公訴ノ私訴異
識ノ申立 證據差出ノ
許否若クハ
順序又ハ証人訊問ノ
次第ニ付キ異議ヲ申
立ル 民事擔當人 被害
ナリ 民事擔當人 者要
償ノ訴ヲナシタル時
被告人ニ代リ辨償ス
ルモ
ベキ義務ア

最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可シ
第三百二條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案
ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ
第三百二條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ヲ申立アリタル時
ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ
但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル
後ニ非サレハ之ヲ爲ス可シ得ス
第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴
訟ニ關係スルコトヲ得
又民事原告人ハ民事擔當人ナシテ其訴訟ニ關係セシムルコ
トヲ得
若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可
シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又

事實コト理由ヲ明示
ハツキリ一切スベ
シメス
證憑シヨウ

ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止ス
第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律
ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ
免訴ノ言渡ヲ爲スニ付スモ亦同シ
第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對
シ犯罪ノ證憑ナキコトヲ明示ス可シ
第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判
言渡ヲ爲ス可シ
私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル
後其裁判言渡ヲ爲ス可シ得
第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ
以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲
ス可シ

費用イリ擔當ヒキウ
ロウ

敗訴 マケ
シシ

請求 マチシ
タテ 還付 カヘ

没收 トリア
ケル 所有主
チモ

逃亡 ニケ
ル

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官
ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス
ヘシ

第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス没收
ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖厄之ヲ還付ス
ルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴ア
リタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時
ハ現ニ捕ニ就クニ非レハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第三百十一條 勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ム
ル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出し監獄長ヨリ之ヲ其裁判所

ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ
上訴期限ヲ輕過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期
限ヲ輕過シタルニ因失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但變災
厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添
ヘ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス
可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得
上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見
ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヤヲ判決ス可シ
上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時書記ヲシテ其旨ヲ訴訟
關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從本案ノ裁判ヲ爲ス可シ
上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アル

證明 シヨウ
コトヲハケル

回復 トリ
モ 通常ノ期

限内 コノ治罪法ニ定
メラレタルレ

ノ期限ナリ

受理ス可キヤ否ヲ判

決ス可シ 訴訟關係人
又ハ其代人

果シテ變災厄難ニカ
ハリタルヤ又其過失

ニ基クヤ否ヲ豫定ス
ルヲ要スレバナリ

干預
タツサ
ハル

費用
其用紙一
枚金三錢

下付
サケワ
タス

告知
ツケシ
ラセ

ニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辨論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時
ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印
ス可シ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干
預シタル檢察官ノ民名ヲ記載ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本
又ハ其拔書ヲ求ムルヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時
ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長
ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控
訴又ハ上告ヲ爲スヲ得キ及ヒ其期限ヲ告知シ又關席裁

上訴期限ノ經過ヲ停

止 控訴上告故障ヲナ
スニハミナ期限ア

レモ告知又ハ記載ナ
ケレハイツマテモ上

訴期限ノツ
キヌ

事由 傍聽ヲ禁シ 公行
タルツケ

傍聽ヲ許ルシオホヤ
ケニ裁判ヲトリ行フ

タル

傍聽
ツバ
ギハ

原告
被告人

治罪法

判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ

得可キ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アル
マテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り

左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一 裁判ヲ公行シタル日又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタル日
及ヒ其事由

二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三 證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタル日若シ宣誓ヲ爲サ
ル時ハ其事由

四 原告ノ證據物件

五 辯論中異議ノ申立アリタル日後日ヲ期シテ申立ツ可キ事

豫審判事 重罪事件ニ
ツキ辯論ニ
日以上ニ渉ル可シト
スルル之ヲ命スルモ
ノトス輕罪以下ノ事
件ニツキテハ此事ナ
シ 整頓 トリソ 檢閱
ラシ

件ヲ申立タルコト是等ノ事件ニ付テ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決
六辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタルコト
第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ
辯論數日ニ渉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルコトヲ記載ス可シ
辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ
檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ
第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ
裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閱シ若シ意

ル

保存
オシ

認印
イトメ
イン

受理
トリアケ
サハシ

上等ノ裁判所 重罪裁
罪裁判等ヲ
判所輕裁
云フ

見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ
第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ
上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ原本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ
第二章 違警罪公判
第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス
一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發言シタル呼出狀
二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡
第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出テ受ク可キ者ノ氏名職業住

其呼出證人

訊問セシ名刺ヲ證人トシテ其陳述ヲ聽ク

所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲ出廷セシムルコトヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辨護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルコトヲ得
第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少シトモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スコトヲ得
第三百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達トノ間少シトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ
又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽ク

コトヲ得ル後ニ於テハ事實參考ノ爲ニ非サレバ其陳述ヲ聽ク可ク

朗讀アゲル

承認

コトヲ得
第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ
第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ
官吏ノ作りタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ
第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ
若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ
第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證據ヲ差

出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ
因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出カシムルヲ得
若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之
ヲ差出ス可シ

法律ノ適用 被告人ノ
所爲ハ刑
法ノ第何條ニテ罰ス
ヘシト云フ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ
民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述
ス可シ

民事原告人 損害ノ要
償ヲ請求
スル
モノ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ
第三百三十一條 呼出テ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代
人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽
キ
半關席裁判ヲ爲ス可シ
民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條 關席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ

請求ニ因リ關席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ
關席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送
達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可
キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書
記ヨリ故障アリタルヲ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ

故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達
ト出廷トノ間少シトモ二日ノ猶豫アル可シ
又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三
百二十六條ヨリ第三百三十條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ
爲ス可シ

其裁判ニ關席シタル者ハ故障ヲ爲スヲ得ス

其裁判ニ關席シタル

者ハ故障ヲ爲スヲ得
ス故障ノ裁判ニ關席
シタル者ハ其申立
人ナルト對手人ナル
トテ問ハス復ヒ故障
ヲ爲ス
ヲ許サズ
法律
刑
法

第三百三十五條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ於
テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲
ス可シ

第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且證據充分ナル時
ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ
言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人
ニ對シ勾留狀ヲ發スルコトヲ得

第三百三十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區
別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルコトヲ得

一 被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民

擬律ノ錯誤 例ハハ被
告人ノ所
犯科料ヲ言渡スヘキ
ニ拘留ノ刑ヲ言渡ス
如キアヤ
マリ

申立書 控訴ヲ爲ス
旨ノ書面

事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三 檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時

ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則
ニ背キタル時

第三百二十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局

ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テ
ハ言渡ヨリ三日内又關席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人

又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス
控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通
知ス可シ

第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ

受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ
若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可

キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

附帶ノ控訴 第二百四十九條ニ

第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲ス可キ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルコトヲ得

新ナル証人云々 新ナル証人又ハ己ニ陳述シタル証人ヲ更ニ呼出スルヲ禁シタルハ裁判ノ迅速ト費用ヲ節減セシ爲ナリ

第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定ナル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ 檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル証人又ハ始審ニ於テ陳述シタル証人ヲ呼出ス可キ得ス

第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

被告人ノミ 檢察官ノザル時ヲ示スナリ

被告人ノミ 控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡ス可キ得ス

第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ關席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可キ得

第三章 輕罪公判 第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

終審ノ對審裁判言渡 始審ナルトハ仍ホ控訴ヲ爲スノ途アリ又關席ナルトハ仍ホ故障ヲ爲スノ途アリ終審對審ノ四字ニ着意スベシ

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ旨渡

第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

第三百五十條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少シトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

豫審ヲ經サル輕罪事件 第二百七條 第二參看

辨解 ヌト

更ニ答辨ヲ爲スヲ得 檢察官ノ求刑其當ヲ得ス又ハ民事原告人ノ要求スル金額ヲ過分ナリトスルハ

治罪法

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明ス可シ 調書又ハ申立書アリタル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辨ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要價ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ 被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辨ヲ爲スヲ得

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十條ノ規則ニ從ヒ 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十條ノ規則ニ從ヒ 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十條ノ規則ニ從ヒ 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十條ノ規則ニ從ヒ

ハ更ニ答辨ス
ルヲ得

一 被告人闕席ヲナス
ノ前管轄ノ言渡
若シハ公訴受理ス可
ラザルノ言渡アル可
キノ申立ヲナシ聽許
セラレズシテ退廷シ
タル申ノ如キ
ヲ謂フナリ
三 例ハハ逮捕ヲ受ケ
又ハ罰金ノ徴收ノ
爲メ財産ノ差押ヲ受
ケタルカ如キ是ナリ

ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三

百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル

被告人ハ左ノ場合ヲ除ク外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障

ヲ爲スヲ得

一 被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二 裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三 被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲ知リタルノ

證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ

場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リタルヨリ三日内ニ故障

ヲ爲スヲ得

第三百五十七條

裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトス

ル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ

新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スヲ得

但是等ノ處分ヲ爲シ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經ザル事件ニ付テハ豫審判事ヲ其指示スル所ノ

條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條

犯罪證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ

無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲

ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ

爲ス可シ

第三百五十九條

被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ

放免全ク公訴ヲ免シ
テ被告人ノ自由
ヲ復ス
ルナリ

釋放罪ノ問ヲ可キアルモ其輕且微ナルノ故ヲ以テ法律上其自由ヲ許サハルニ因リ其勾留ヲ解クナリ

其裁判所ノ會議局輕

裁判所ノ會議局ナリ

管轄裁判所 重罪ナル

裁判所違警罪ナル
ハ違警罪裁判所

爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ
第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ
若シ豫審ヲ經ル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ
但被告人勾留ヲ受ケタル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ
訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證據ヲ發見スルコトナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

當然アタリ
マヘ

第三百六十二條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲コトヲ得
第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルコトヲ得
第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルコトヲ得

一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡有タル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

金額
キ
ン
ダ
カ

二被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケ
タル時

三民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民
事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四檢察官其他訴訟關係人ハ管轄 違越權攝律ノ錯誤又ハ無
效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ
爲ス可シ得

關席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテ
モ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲ス可シ得但第三百五十
六條ノ場合ニ於テハ五日內ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ
於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所

被告人勾留ヲ受ケ
タ

ル時 禁錮ノ刑ノ言渡
ヲ受ケタル時

ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條 第三百二十九條ヨリ第三百四十二條マテ及
ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十九條 輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ
控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第
二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移ス
ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條 控訴ノ關席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ關
席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審
ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告
ヲ爲ス可シ得

第四章 重罪公判

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作リ又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條 公訴ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

ル時及ヒ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ニ付キ大

審院ノ判決アリタル時即チ是ナリ

集取 トリアツ

概畧 アラ

以外 カ

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人

ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作りタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲ス

裁判所長ニ請求スルヲ得

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラズ

四罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模様
二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地
三 豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證據
四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十四條 公訴ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

シムルヲ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日前に公

訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判

事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ

依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリ

ヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判

所所屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及ヒ代官人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代官人一名ヲシ

テ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ル

送達アリタルヨリ二
十四時ノ後 被告人カ
ケタル時ヨ 選任 ヲラ
リ起算ス 選任 ヲラ
カ所屬 フツ
ス

改選 アラタニ辯護人
ヲ選
チユラフ

ヲ得ス

第三百七十九條 辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改

選ス可正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任ス

ルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可

シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調

書ヲ作り辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヲ記

載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末

書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條 辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言

渡ノ效ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタル

刑ノ言渡 無罪免訴ノ
言渡アリ
ルハ無
效トセズ

履行 フミオ
コナフ

辯論ニ取掛ル前ニ非

サレハ己ニ辯論ニ取掛リタル上ハ

被告人自ラ其便益ヲ棄ルモノトスベシ又

本案ノ辯論チナス豫備既ニ整フテ差支ナ

キヨリセシモノト見做シ得可キカ故ナリ

抄寫カキ接見而會ス

閱讀

允許キハト

開廷 其事ニトリカハル

コアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルコトヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルコトヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判官渡アルマテ被告人ト接見スルコトヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限ニ在ラス

證人トシテノ上

公廷シテ面前マハ

限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クコトヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキコトヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第三百八十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少シトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開庭ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開庭ス可キコトヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラズ

第三百八十七條 裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪

席判事ト爲ス可シ得

第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告

答辭 コトハノ

齟齬 ヌキチガヒ

呼立ツ可シ 出廷シタルヤ否ヤ

ヲ檢スルナリ

注意 キチツケ

確認セズ 知ラズトイッワル

辨明 オヒワケ

反證 被告人ノ罪トナルベキ証據ヲ原

告人ヨリ出セシテ被告

人ヨリ反テ罪トナラズ

對質 ツキアハセテダハス

席判事ト爲ス可シ得

第三百九十四條 證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スルコト又證人ナル他ノ證人ト對質セシムルコトヲ請求スルヲ得

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辯論ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告

人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セズ又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サ、ル可カラズ

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辯論ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告

人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セズ又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サ、ル可カラズ

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辯論ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告

前項ノ處分更ニ証人
ルヲ又對質スル
ヲノ取計ヒ
愛憎アイスルタメニ
思ヒニシムタメニ罪
ヲ重シセント思フ
畏懼 此事柄チイハ
他日被告人ノ害
ヲナサントヨ
トガル
退席 シラスヲタチ
ノカセル
終結 ラリチ
ヤリチ
發見 ミイ
ダス

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヲ得
第三百九十五條 裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ
面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヲ得サル可シト思料シタ
ル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證
人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヲ得
裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公庭ニ呼入レ
其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申
立シム可シ
第三百九十六條 裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタ
ル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルヲ言渡ス可シ
第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條
件ニ付キ豫審ヲ求ムルヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シ
タル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫

法律適用ノ爲メ其意
見ヲ陳述ス 被告人ノ
第何條ノ罪ニシテ何條
ノ刑ニ該ル者ナリト
ノ意見ヲ陳
述スルナリ

閉庭前 重罪裁判所ハ
常ニ之ヲ開カ
ザルヲ以
テナリ

審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適
用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ
被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヲ辯論ヲ
スルヲ得

第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴
ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔
當人ハ答辨ヲ爲スヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヲ得但閉庭前之ヲ
判決ス可シ

第四百條 被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從

原被ノ要償無罪ノ言
タリト雖モ被告入ハ
必シモ賠償ノ責ヲ免
ル、一能ハザル場合
アリ又第十六條ノ規
則ニ從ヒ被告入ヨリ
ナス所ノ要償ノ場合
ヲモ包括ス
ルモノナリ

刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲
シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲
シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡
シヲ爲ス可シ

第四百二條 辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他
ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ

重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲ豫審ヲナサシ
メ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁
判言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可シ

第四百四條 闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及

ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被證人ノ陳述
ヲ聽ク可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償
ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事擔當人ハ答辨スルヲ得

第四百五條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請
求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條 闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非
サレハ上告ヲ爲ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ
爲ス可シ

第四百七條 闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期

捕ニ就キタル時トテ
ラレタル
トキ

本會今回開應次會其
ニ開應セ
シキ

満免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコト得但捕ニ就キ
タル時八十日以内ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條 故障ノ申立ハ闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ
之ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス
可シ

其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於
テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條 闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所開應ノ後ハ其地
ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ
通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡
ヲ爲ス可シ

上告 上訴ノ一ニシテ
豫審又ハ公判ノ

言渡シ法律ニ背キ定
規ニ違フ者アル場合
ニ於テ其言渡ヲ取消
サレンコトヲ大審院へ
請求スル一 第二百三
モノナリ 一十七條第
二百三十八條 第二百
七十九條ニ定メタル
原由アルコトヲ照ラシ
テ忌避ノ申立ヲ爲ス
モ會議局ニ於テ之ニ
ヲ認可セザル時
重罪ハ裁判官五名ニ
テ裁判ヲ爲シ輕罪ノ
控訴ハ三名以上ニテ
判決ヲナス等ノ規則
ニ背シ又ハ四十七
條ノ規則ニ背キタル

第五編 大審院ノ職務
第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ
左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スコトヲ得

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セザル時
二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三 法律ニ背キ管轄 違又ハ管轄ナリトノ言渡若シハ管轄ニ
非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ
記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合
ニ於テ之ヲ認可セザル時

五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セザル時
六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

時モ亦構成不規則ナルモノトス無効ノ記載ナキ規則ニ背キタル云々例ハ八第規則ニ背キ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメザルニ因リ其被告人異議ノ申立ヲ爲スモ之ヲ認可セスシテ裁判言渡ヲ爲スノ類五期滿免除大赦若シハ確定裁判ノ効力ヲ得タル事件ニ關スル公訴ヲ受理シ又ハ是等ノ事情ノ一ナキ場合ヲ誤リテアリトシテ公訴ヲ受理セザリシガ如キモノトス六第百二十八條第百七十六條第百

七裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時
八裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時
九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時
十擬律ノ錯誤アル時
十一越權ノ處分アル時
第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタル又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スヲ得ス
第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關

八十三條第百九十四條第百二十條第百七十五條第百九十三條第百三十二條等ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサ九第百二十八條九條及ヒ第三百四條ニ於テ定ムル如ク裁判言渡ニハ必事實并ニ法律ノ理由ヲ缺クテ得スシテ人ヲ殺スノ意ヲ以テ詐稱誘導シテ人ヲ死ニ致シタル者アラシテ刑法第百九十七條及ヒ刑法第百九十二條即チ謀殺ヲ以テ論ス可キニ却テ刑法第百九十四條故殺ヲ以テ論シタルカ如キコトナリ一 例ハ八犯罪事件禁錮ノ刑ニ該テサル

スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル理由ニ付上告ヲ爲スヲ得
第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スヲ得
大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スヲ得
第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス
第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス
第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ

場合ニ於テ自由ヲ停止ス可キ令狀ヲ發シタルカ又ハ勾留ノ期日成規ニ過シタルカ又ハ現行犯ノ場合ニアラスシテ豫審判事ヲ待タスシテ豫審處分ニ取掛リタルカ如シ被告ノ利益ノ爲メニ定メタル規則ニ背シ重罪ノ被告人辨判ヲ言渡サレ又ハ被告人最終ノ辨論ヲ爲サンコトヲ許サレシテ裁判ヲ言渡サレタル場合等 附帶ノ上

之ヲ對手人ニ送達ス可シ
第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日內ニ
趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時內ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ
第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日內ニ
答辨書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ其答辨書ヲ受取リタルヨリ二十四時內ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ
第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辨書
ハ二通ヲ作リ一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ
私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書
又ハ答辨書ニ付テモ亦同シ

簿冊ヲヨウ
登記ノセ
上告申立人及ヒ對手人
被告人民事原告人
又ハ民事擔當人ヲ
云フ檢察官ハ其中ニ
含蓄セズ
專任
モテ

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速
ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ
檢察官ハ其書類ヲ五日內ニ大審院檢察長ニ差出シ且意見ア
ル時ハ之ヲ添フ可シ
第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代理人ヲ差出ス
得
重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重
罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ
言渡ヲ受ケタル者自ラ代理人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權
ヲ以テ其院所屬ノ代理人中ヨリ之ヲ選任ス可シ
第四百二十二條 院長ハ刑事局判事ニテ專任判事一名ヲ命ス

檢閱シテ自己シテ

經由手ヲ擴張ロシテ
シユル
ウスル

檢事長 檢察官上告申
立人ナル

可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閱シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意ヲ付ス可カラス

第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辨明書ヲ差出スヲ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辨明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代理人ニ報知ス可シ

第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事長及ヒ代理人ハ各其趣意ヲ辨明ス可シ

檢事長及ヒ代理人ハ各其趣意ヲ辨明ス可シ

代理人刑ノ言渡ヲ受ケタル者ナル

ト

棄却アゲヌ

破毀ケシ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代理人ヲ差出サ
ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲スヘシ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルコトニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事

件ヲ移スコトナク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルコトアリト

其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサ、ル時豫審ニ於テ檢証處分ヲ爲スニ當リ書記ヲ立會ハシメザリシニ竟ニ証憑ヲ發見セザリシ場合公判ニ於テ被告人ヨリ裁判官ヲ忌避スト雖モ法律ニ背キ其申立ヲ認可セズ然ルモ其裁判官直ニ自ラ回避シタル等ノ場合言渡合等コレナリ

幾分ニ對シ上告アリタル場合豫審又ハテ共犯又ハ數罪ヲ合セテ一箇ノ言渡ヲ爲シタル場合ニ於テ其言渡ノ幾分ニ對シ上

雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサ、ル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノナク止テ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

告スルモ他ノ裁判所ノアル時

原裁判所ガ重罪裁判所ナルハ重罪裁判所ハ常立ニ非サルヲ以テ他ノ裁判所ヲシテ執行セシメ接近モザルヲ得ス

同等ノ裁判所原裁判所ニ對シテ定示シ重罪裁判所ナレバ他ノ重罪裁判所ヲ定示スル

裁判言渡即チナリ

ノ罰セザル所爲ナリトスルハ無罪ノ言渡ヲ爲シ原裁判ニテ過重ノ刑ヲ言渡タリトスル時ハ改テ相當ノ刑ヲ言渡ス者トス

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スヲ得

第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スヲ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルヲ得

一大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

大審院ノ判決若
哀訴シ法式ニ合ハス
又ハ判決ニ錯誤アリ
タルハ尙ホ覆審ヲ
乞フナ
云フ

再審ノ訴 控訴上告ヲ
經尽シ若シ
ハ是等ノ上訴ヲ爲サ
ルニ因リ被告人コ
害アル裁判言渡既ニ
確定シタル後其裁判

二訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サハル時

三同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタル
ヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達
シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辨書ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ

第四百三十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三
日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ
言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スヲ得但裁判確定
ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

言渡大ニ事實ニ違フ
ノ確証アル場合ニ於
テ再ヒ之ヲ審明シ更
ニ相當ノ裁判アラン
ヲ請求ス 裁判確定
ノ後ニ非サレハ 裁判
セサル者ハ尙ホ通
常規則ニ從ヒ上訴
以テ救護挽回ス
ルノ道アルヲ以
テ敢テ非常ノ法
ニ依ルヲ要セス
二例ハ甲者ヨリ東
京裁判所ニ於テ瀛
車旅客乙者ノ物品ヲ
盜取シタルトシテ刑
ノ言渡ヲ受ケタル
ルニ丙ナル者亦同一
ノ事件ニ付横濱裁判
所若シハ同一ノ裁判
所ニ於テ刑ノ言渡ヲ
受ケ而シテ皆共ニ共犯

一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ
當リ殺サレタリト認メテ現ニ生存シ又ハ犯罪前既
ニ死去シタルノ確証アリタル時
二同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタ
ル者アリタル時
三犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ証書ヲ以テ當時其場所ニ
在ラサルヲ証明シタル時
四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリ
タル時
五公正ノ証書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルヲ証明
シタル時
第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スヲ得可キ者左ノ如シ
一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

ト認メラレサル時三ノ如キヲ謂フナリ
 例ハ一月一日東京ニ犯罪アリ而シテ其犯罪ニ付キ刑ノ言渡ヲ受ケタル者十二月卅一日ニ作リタルノ公正ノ証書ヲ以テ其日長崎ニアリタル旨ヲ証シタル場合ノ如キ是ナリ其公正ノ証書トハ地方廳裁判所戸長役場等ニ於テ官吏ノ作リタル書類ナリ
 四 裁判官檢察官警察官賄賂ヲ收受聽許シ若シハ怨ヲ挾サミテ被告人ヲ陷害シ証人鑑定人通事詐偽ノ陳述ヲ爲シテ被告人ヲ陷害シ又ハ何人ヲ問ハス不實ノ事ヲ以

二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事長
 三大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ
 四刑ノ言渡ヲ受ケタル者
 五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬
 第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ何時コトモ之ヲ爲ス可シ得
 第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證據書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
 原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘテ之ヲ大審院檢事長ニ差出スヘシ
 原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審ノ訴ヲ

テ被告人ヲ被告陷害シタルニ因リ刑ニ處セラレタルモ消滅刑ノアリタル時消滅刑ニ因リ刑ノ消滅スルナリ他ノ事件ヲ閣キ刑執行ヲ急ニ停止スルヲ要スルコトアルヲ以テ他ノ一切ノ事件ヲ閣キ先ツ其判決ヲ爲ス者私訴公訴ニ附帶トス私訴スルノ故ヲ以テ共ニ之ヲ移ス

爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ
 第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ
 第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ
 第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲可トイヒテ再審ノ訴ヲ爲シタル他ノ裁判所ニ移可シ其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ其事件

揭示公告 ハリダシオ
ホヤケニツ
ル

特別裁判所 高等法院
若クハ陸
海軍裁判所等 都テ通
常ノ裁判所ニ非サル
モノヲ 忌避ノ原由 其
判官盡ク忌避セラ非
ル、如キコレナリ 非
常ノ事變 地方ノ騷擾
傳染病流行
等ノ如キ 管理ツコソ
コレナリ

サ他ノ裁判所ニ移スコトナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ
第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又
ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ
復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所ト問ハス管轄ニ
非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若ク
ハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルコト能ハサル時ハ檢
察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲コト得
大審院檢事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ
爲スコト得

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ
其趣意書ニ訴訟書類ヲ添之テ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

管理シハ

公安 犯罪ノ性質例ヘ
ハ國事犯ニシテ
其地方ニ於テ被告人
ヲ奉信スルノ徒衆シ
若クハ被告人ノ員數
極テ多ク又ハ地方ノ
民心騷動シテ被告人
ヲ劫奪シ或ハ良民憤
怒シテ慘虐ノ所爲ヲ
被告人ニ加ヘントス
ルノ恐アル等其他裁
判ニ對シ紛擾危險ヲ
生スルノ妨礙ヲ
除去シ裁判所ヲ
シテ獨立不羈ノ位
地ニ置カシムルヲ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ
集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管
轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定シ
ス可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其
他重大ナル事情ニ因裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐
アル時ハ公安ノ爲其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移コト得
第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿
ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ
第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申
立ヲ聽クコトナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ

云 被告人身分ニ付キ
 嫌疑アル場合 被告人
 ヲハ其裁判所ノ高等
 ナル官吏ナルモ又ハ
 巨商大賈タル等 地方
 ノ如キチイフ 地方
 ノ民心ニ嫌疑アル場
 合ニ付キ多ク其例ヲ
 見ル可 訴訟ノ模様ニ
 キナリ 例ヘハ刑法
 因リ云々 第二百七十
 一條 第二百七十二條
 ノ罪ニ付訴訟ヲ受ケ
 其他ノ人民之ヲ憎ム
 其甚シキ場合ノ如キ
 是ナ

因リ裁判ノ公平ヲ維持スルヲ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ
 爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可ト得
 第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ 訴ハ管轄裁
 判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲ス可ト得
 民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所
 ニ於テ異議ノ申立ナシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ
 前項ノ訴ヲ爲ス可ト得ヌ
 第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ 訴ヲ爲スニ
 ハ其趣意書ニ通テ原裁判所ノ書記局ニ差出スヘシ
 書記ハ 速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタ
 ルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出ス可ト得
 第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ
 前條ノ 訴ヲ判決ス可シ

裁判確定ノ後 上訴手
 ニ盡キタルカ或ハ上
 訴期限ノ經過シ去リ
 タルニ因リ原裁判言
 渡ノ變更シ能ハザル
 場合ニ至リタ
 ルモチイフ
 第四百六十條 死刑ノ
 訴訟書
 類ヲ司法卿ニ差出シ
 之ヲ鄭重ニスル者ハ
 一旦之ヲ過ルモハ取
 戻ス可ト得サレハナ
 リ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ 訴アリタル
 時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス
 第六編 裁判執行復権及ヒ特赦
 第一章 裁判執行
 第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サ
 レハ之ヲ執行ス可カラズ
 第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ
 訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ
 司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ
 其執行ヲ爲ス可シ
 第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ
 直ニ之ヲ執行ス可シ

徴收トリダ

破壊スハ廢棄スル處

分トリハ

別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム刑法附則ニアリ

一 刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヲ指示ス

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徴收ス可シ

破壊又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分スヘシ

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ附テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ關席裁判アリタル時ハ

其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一 犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二 罪名刑名

三 再犯

四 裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五 對審裁判又ハ關席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送

致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違審罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置

ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ

疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑

ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前

二 刑ノ言渡ヲ受ケタル所爲及ヒ之ニ言渡シタ三 再犯以上ニル刑三 係ルルハ其旨五 刑ノ言渡ヲ受ケ關席ノ裁判ノ二者何レナリヤノ一是レナリ

藏置 オサメオシ

疑義 ヲサメガヒ

認定シカトミサダメル

ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ
裁判ニ於テ本犯ナルコトヲ認定スルコト能ハサル時ハ事實參考
ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被
ノ證人ヲ呼出スコトヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ
受タル者申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ
但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費
用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復權

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經
過シタル後刑ノ言渡ヲ受タル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ
復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所

復權 重罪ヲ犯シ因テ
公權ヲ剝奪セラ
レタル者ヲシテ其將
來ノ權ヲ復セシムコト
ヲイフ

一 本人受ケタル所ノ
刑如何ナリシヤヲ
明ニシタルヲ証ス
謹直以テ獄則ヲ守リ
悛改ノ狀アリタルヲ
証ス 犯人ノ必意如何
スヲ知ルノ資トナ
ル 五 犯人ノ行為如何
ヲ搜索スルノ便
アリ品行ニモ

檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一 裁判言渡書ノ謄本

二 主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルコトヲ證明スル書類

三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書

四 賠償及ヒ裁判費用ヲ辯濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證
書

五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前
條ノ書類ニ意見書ヲ添之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願
關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閱シ其

上奏 天皇陛下へ
申上シル

勅裁 天皇陛下
ノ御判決

願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復権ノ願ヲ棄

却シタル時ハ司法卿其旨ヲ控訴裁判所檢察長ニ通知シ檢

事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢察長ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ

經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲ス可キ得ス

更ニ復権ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條 復権ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可

狀ヲ控訴裁判所檢察長ニ送致シ檢察長ヨリ願書ヲ差出シタ

ル始審裁判所檢察長ニ送致ス可シ

拘事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁

判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

裁可 勅裁ニ因リ
裁可セラル

特赦 特別ナル赦典ニ
シテ之ヲ與フル
ハ天皇陛下ノ
特權トス

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢

察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ル可キ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢

察官ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ

上奏スヘシ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ

特赦ノ申立ヲ爲ス可キ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑

ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡

ナ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ
於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

明治十六年七月三日御届

同 年八月廿五日出版

定價金五拾錢

註解兼
出版人

大阪府平民

福井 淳

東區石町壹丁目十四番地

弘通

花井 卯助

大坂東區安土町四丁目

書肆

大村 安兵衛

大坂東區淡路町二丁目

東京發賣

加藤 正七

東京日本橋區檜物町八番地



